【研究ノート】長崎県本土部の地域集団の存在と動向

―弥生時代中期から古墳時代を中心に―

古門 雅高

はじめに

本稿では弥生時代中期から古墳時代にかけて長崎県本土部の各地域に存在した様々な基礎集団（血縁や地縁によって形成される自生的な生活共同体）を「地域の社会集団」と整理し、略して「地域集団」と呼ぶ。そこには家族より規模が大きい氏族、クラン、部族、村落などを含めるが、首長制社会とされる弥生時代の「クニ」は除外しておく。

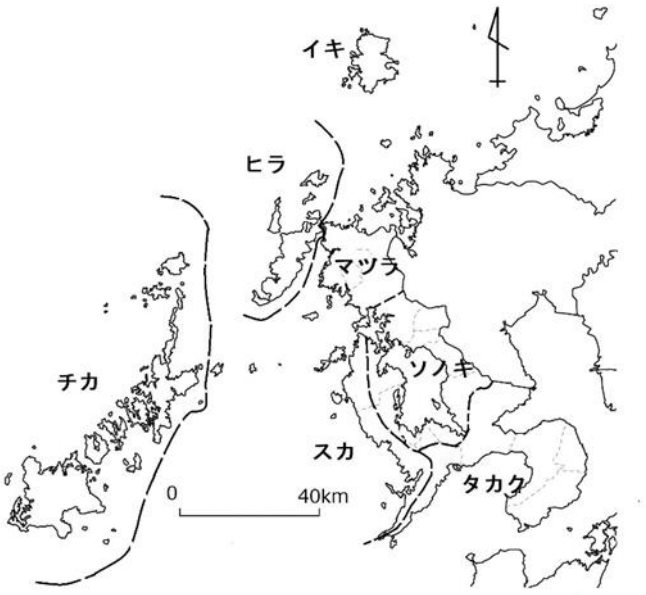
また、本稿の地域集団は、集落の変遷や威信財の保有状況および墳墓の在り方などを総合的に勘案して認定したものではなく、同集団の存在を示唆すると思われる遺構ないし遺物と鏡の分布から、そのように見なしたもので、言わば見かけの地域集団であることをあらかじめ明記しておく。さらに地域集団の数においても同一系譜の集団が長期間存続した場合、同集団の指標となる遺構や遺物を複数遺すことが想定されるため、これまた見かけの数であることを断っておく。

次に筆者が地域集団の存在の決め手として選定した指標を具体的に示す。鏡は本稿で扱う全時代において地域集団の存在を示す指標とする。一方で、時代別の指標として、弥生時代中期では北部九州系の大形成人用甕棺墓の存在を指標とし、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけては遺構から出土した鉄製品の有無を指標とした。続く古墳時代前期から中期にかけては前方後円墳と遺構出土の刀剣を指標とし、古墳時代後期では横穴式石室の玄室の床面積を指標とした。さらに抽出した地域集団の中で、鏡と指標となる遺構遺物を併せ持つ集団を有力集団とし、他の地域集団との差別化を図った。その上で当地の地域集団の動向を可視化しようと試みた。

1　本県本土部の地域区分

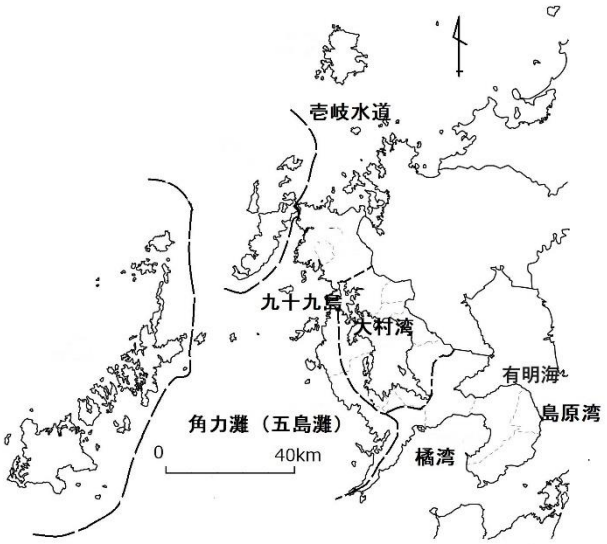
本稿では本県本土部を律令制下の地域名を参考に6地域に分けた（第1図）。北からマツラ（松浦）、ヒラ（比羅）、ソノキ（彼杵）、タカク（高来）、チカ（値嘉）、スカ（周賀）の各地域である。

現在の市町名に反映させると「マツラ」が松浦市と平戸市の一部、「ヒラ」は平戸市、「ソノキ」は大村市と東彼杵町、川棚町、そして西海市東部を含む。「タカク」は長崎市東部、旧多良見町を除く諫早市、雲仙市、島原市、南島原市が該当する。「スカ」は長崎市西部と西海市西部、「チカ」は五島市、新上五島町、小値賀町の各行政範囲とした。



第1図　長崎県本土部の地域区分

また、前述の各地域をさらに分割して小地域を設定する場合は、それぞれの小地域が接する海域名を冠して小地域名とした。具体的にはマツラは壱岐水道沿岸地域と九十九島沿岸地域に分割し、ソノキは大村湾東岸と同西岸の地域に、タカクは有明海沿岸、島原湾沿岸、橘湾沿岸の各地域にそれぞれ分けた（第2図）。周囲を海に囲まれた本県では当然のことながら生活を海に依存するため、原始古代における地域区分は海域ごとに分けた方が有意義な結論を導けると考えた結果である。



第2図　長崎県本土部の小地域区分

表1　弥生時代中期の北部九州系大形成人用甕棺墓の分布（古門2020より）

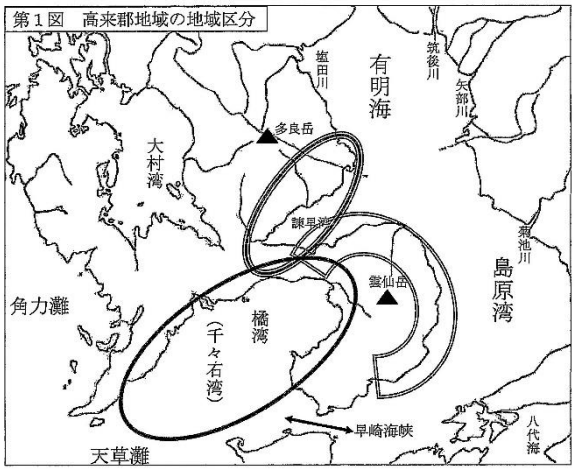
◎大形甕棺　　○中形甕棺

時期区分	地域区分 / 橋口編年	チカ	ヒラ	マツラ	スカ	ソノキ	タカク
前期	ＫＩａ	○殿寺4号 ○宇久松原4号、5号、6号	○馬込9号				
前期	ＫＩｂ	○殿寺2号					◎景華園
前期	ＫＩｃ	◎浜郷2次7号	◎馬込11号				◎景華園
中期前半	ＫⅡａ			◎里田原44C3号 ◎栢ノ木2号 ◎久保園2、4号			
中期前半	ｋⅡｂ	◎浜郷1966		◎栢ノ木1号 ◎久保園3号			◎北岡金毘羅祀 ◎大野原2号
中期前半	ｋⅡｃ						◎佃54区 ◎大野原3号、4号 ◎景華園
中期後半	ＫⅢａ					○富の原B地点2号、8号、9号	◎景華園 ◎帆崎
中期後半	ＫⅢｂ						◎景華園
中期後半	ＫⅢｃ					◎富の原B地点16号	◎景華園
中期後半	ｋⅣａ				◎東上	◎富の原B地点2、4号 ◎富の原B地点20号 ◎麻生瀬1号	
後期	ｋⅣｂ					○竹松201405ST6 ○白井川22号	○陣内 ○今福

２　長崎県本土部の地域集団の研究史

長崎県本土部の弥生時代から古墳時代の地域集団の研究は管見の限りきわめて少ない。かつて中尾篤志や宮﨑貴夫によって弥生時代の五島列島（本稿ではチカの地域）の海人あるいは海民の検討が行われ、その勢力の伸長や消滅、移動、再編などを考察している（中尾 2005、宮﨑 2019）。

一方、野澤（竹中）哲朗はタカクの古墳の検討を行う中で、この地の古墳時代後期後半に多良岳南麓、島原半島の北部から東岸、橘湾沿岸の３地域に「それぞれある程度の自立性をもった集団」（竹中 2014 p. 55）が存在し、律令時代にも継続したことを指摘している（第 3 図）。筆者も基本的にこの野澤の見解を支持する（註 1）。



第 3 図 高来郡の地域区分（竹中 2014 より）

３　本県本土部の地域集団および有力集団の動向

ここからは、前述のように時代ごとに地域集団の存在を示す遺構や遺物を手掛かりとして同集団を認定し、その後、全期間の指標である鏡の分布と重ね合わせて、地域集団の中で有力な集団を抽出し、その動向を明らかにしていく。

（１）弥生時代中期の地域集団

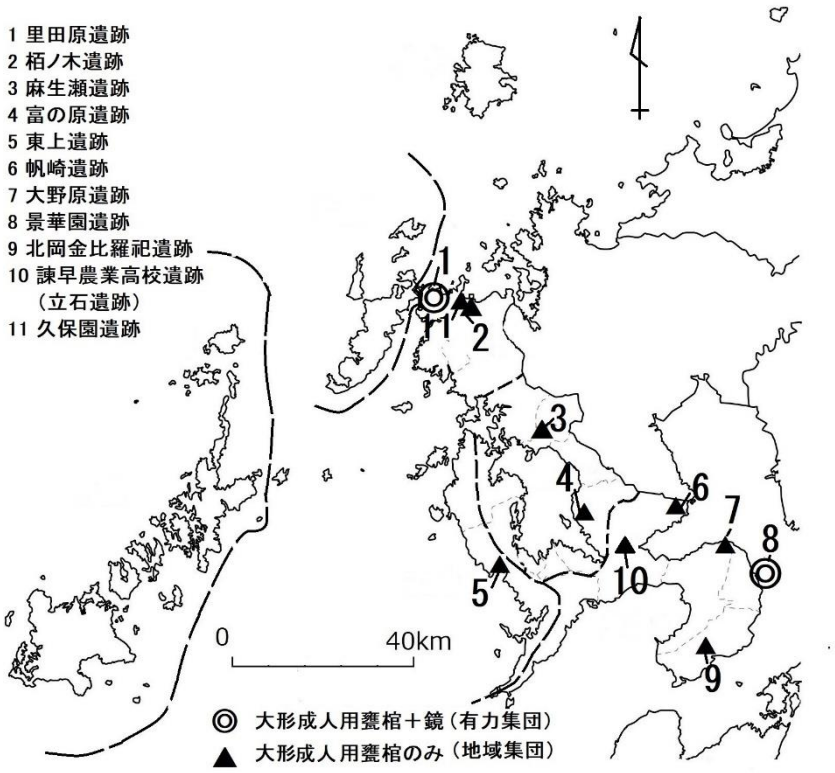
弥生時代中期は鏡と北部九州系の大形成人用甕棺墓を指標とし、その分布から推し測って 11 の地域集団が存在したと想定した（第 4 図）（註 2）。以前、筆者は本県本土部の北部九州系の大形成人用甕棺墓の出土地が時代によって移動していることを指摘し、その背景にいわゆる「貝の道」のルート変更があるのではないかと推測した（古門 2020）。

木下尚子によると北部九州の有力者が好んだ貝輪の原料となる南海産のゴホウラやオオツタノハの交易ルートは、弥生時代前期から中期前半までは五島列島や西彼杵半島西岸の外海を南下ないし北上するルートであったが、弥生中期中頃以降は有明海を中心とした内海ルートに移行したという（木下 1996）。本県本土部の北部九州系の大形成人用甕棺墓の出土分布を見ると、弥生時代前期にチカ（五島列島）やヒラ（平戸諸島）で出土していたものが、中期初頭にマツラの壱岐水道沿岸部に移動し、中期中頃にはタカクの有明海沿岸部および島原湾沿岸部に移動している。さらに中期末にはソノキの大村湾東岸と西彼杵半島西岸の角力灘（五島灘）沿岸に移っている（表１）。このように木下が指摘する貝の道のルート変更と、本県本土部の北部九州系の大形成人用甕棺墓の分布の移動の様相は極めて整合的である。しかし、両者の相関を証明するための根拠が今のところ甕棺墓の分布の移動のみであるため今後更なる検討が必要である。

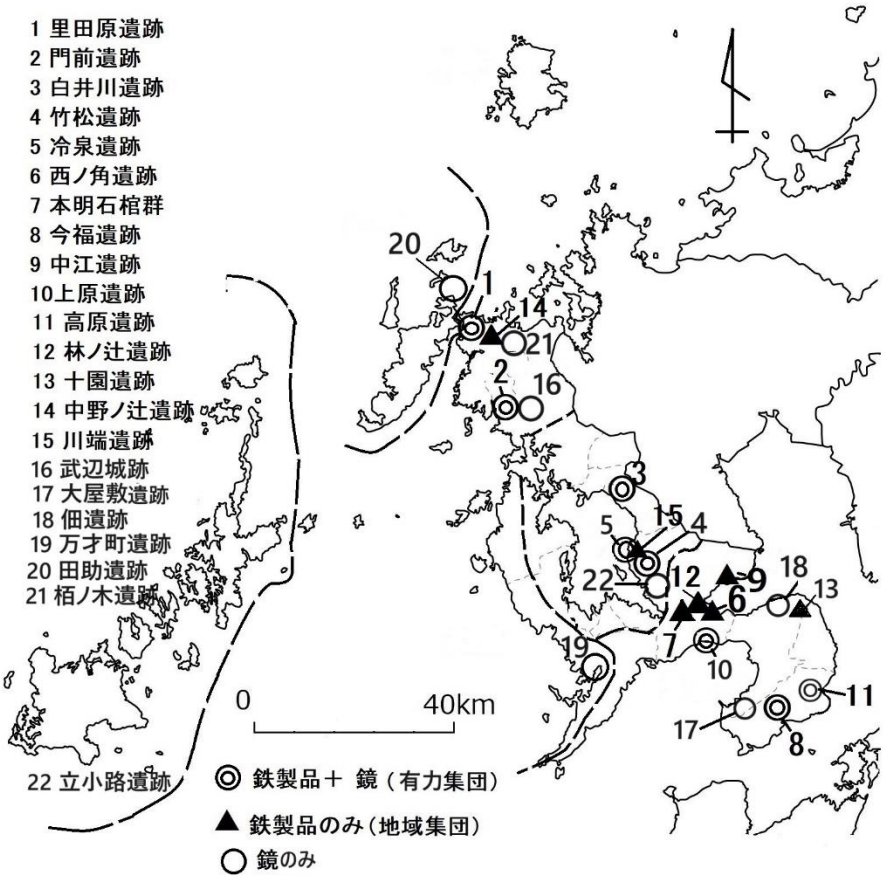
また、この時期の地域集団の中で鏡と北部九州系の大形成人用甕棺墓を併せ持つ集団はマツラの里田原遺跡（第 4 図 1）とタカクの景華園遺跡（第 4 図 8）の地域集団のみであるため、両者が当時の有力集団であると考える（註 3）。

（２）弥生時代後期から古墳時代初頭の地域集団

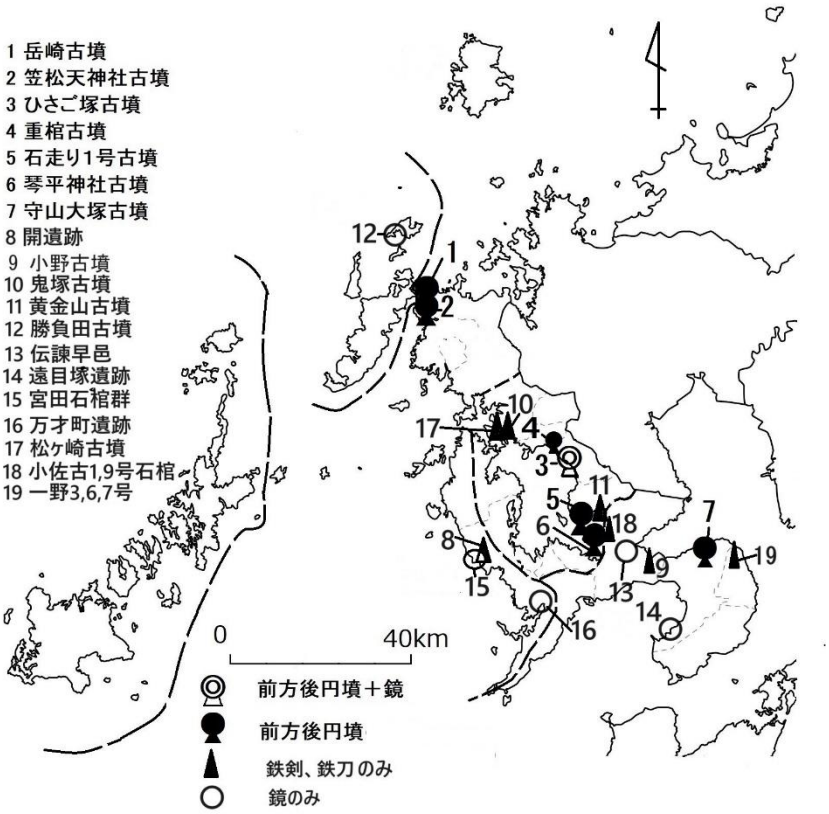
弥生時代後期から古墳時代初頭の地域集団の存在を示す指標に、鏡と遺構出土の鉄製品を選択し



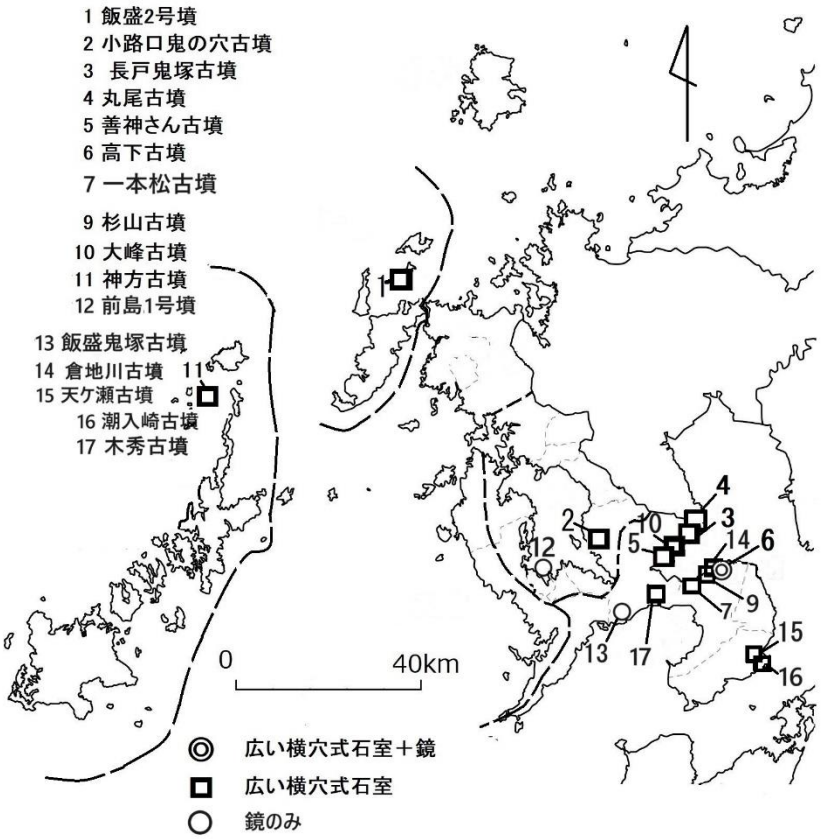
第４図　北部九州系大形成人用甕棺墓の分布から想定した弥生時代中期の地域集団



第５図　鉄製品の分布から想定した弥生時代後期から古墳時代初頭の地域集団



第６図　前方後円墳と刀剣の分布から想定した古墳時代前期から中期の地域集団



第７図　横穴式石室の玄室面積（6 平方㍍以上）から想定した古墳時代後期の地域集団

（表 3)、その出土分布から地域集団の存在を推定した。その結果 22 の地域集団が想定できた（第 5 図)。このうち 15 集団が鏡を保有するところから、当時の地域集団の 3 分の 2 近くに鏡が行き渡っていたと見られる。本稿ではこのうち鏡と鉄製品を併せ持つ 8 つの地域集団を有力集団と考える。

この時期の地域集団の中で特異な集団は、タカクの有明海沿岸の集団である。同地域の集団は鉄製品こそ保有しているものの、その多くは鏡を所有していないという特徴がある（第 5 図)。当時の鏡の分配システムから疎外されていた可能性も考えておきたい。実際、弥生時代の鏡の分布を見た場合、県北部のマツラやヒラには舶載鏡が多く、県南部のタカクは倭製鏡が多い傾向にある（古門 2023)。倭製鏡が多いタカクにあって、その倭製鏡すら保有していない有明海沿岸地域の集団をどのように評価するかが今後の課題である（註 4)。

また、同地域はマツラの門前遺跡やソノキの冷泉遺跡、タカクの島原湾沿岸地域の高原（たこら）遺跡で出土している素環頭の刀子が未発見であることにも注意が必要である（表 3)。素環頭刀子はこれまで舶載品とされていたが、近年その一部は九州島内で製作、流通していた可能性が指摘されている（立谷 2020)。鏡と同様に流通ルートから疎外されていた可能性も考えておきたい。

なお、この時期の本県本土部の地域集団の状況は、前代の弥生時代中期と比較した場合、集団の数こそ増えてはいるが、前代とほぼ同じ地域に存在しており、地域集団間に大きな変動はなかったと考える。

（３）古墳時代前期から中期の地域集団

古墳時代前期から中期の地域集団の存在を示す指標として鏡の他に前方後円墳と遺構出土の刀剣に着目し、その分布から当該期の地域集団が 19 存在したと推定した（第 6 図)。この時期の当地の有力者の墓を見ると、前方後円墳に埋葬された有力者と箱式石棺ないし石棺系石室という在地の伝統的な墳墓に埋葬された有力者に分かれる。したがって、前方後円墳のみを地域集団の指標とした場合、箱式石棺などに埋葬された有力者の存在が反映されず、全体の傾向を見誤ることになる。そのため、前方後円墳に加えて、当時の威信財である刀剣に着目し（表 4)、遺構から出土する刀剣も地域集団の存在を象徴する指標と想定して論を進めていく。

前方後円墳の中で鏡を保有するのは東彼杵町のひさご塚古墳（第 6 図 3）のみで、それも舶載鏡ではなく倭製鏡の捩文鏡である（表 2-18)。舶載鏡ではヒラの的山大島（あずちおおしま）の勝負田古墳（第 6 図 12）出土の後漢鏡である長宜子孫内行花文鏡がある（表 2-6)。同鏡はこの時期の本県本土部で、唯一の後漢鏡である（註 5)（註 6)。勝負田古墳がある的山大島は平戸島北端から北へ 7 ㌔の離島であり、同墳は前方後円墳ではなく、在地系の石棺系石室である可能性が高い（古門 2022)。さらにヒラにはその後も前方後円墳が築造されなかったことを考え合わせると、本県本土部では新たな権威の象徴である前方後円墳に埋葬された有力者や有力集団のみが鏡を保有していたわけではなく、従来の在地の墳墓に埋葬された人物も鏡を保有していたことが分かる。このことは当時、権力の二重構造ないし新旧勢力が対峙するという政治的社会的状況が生じていた可能性を示唆するものであろう（註 7)

一方、刀剣の出土状況としては、長崎市の開（ひらき）遺跡（第 6 図 8）で発見された箱式石棺に鉄刀 1 本、鉄剣 2 本、鉄鏃 5 本、刀子 2 本という異例の数の鉄製武器が副葬された墳墓が注目される（表 4-6)。この鉄製武器の数量は本県本土部で遺構から出土したものとしては現状で最多の量である（表 3、4)（註 8)。開遺跡があるスカの地域は古墳時代前期後半から中期にかけて鏡や鉄製品が集中しており（第 6 図)、筆者は倭王権の朝鮮半島への軍事進出に関与した地域集団の存在を想定して

表２　長崎県本土部出土鏡一覧　（古門2023より）

地域	No	図版No	出土遺跡	舶倭	時期	面径	鏡式	出土地名	遺跡内容	文献
マツラ・ヒラ	1	5-1	里田原遺跡	舶	弥生中期初頭	9	多鈕細文鏡（完形鏡）	平戸市田平町里免	甕棺	1
	2	5-11	田助古墳	舶	弥生終末から古墳前期	—	内行花文鏡	平戸市	箱式石棺	2
	3	5-8	田助古墳	舶	弥生終末から古墳前期	17	上方作系浮彫式 獣帯鏡	平戸市	箱式石棺	2
	4	5-5	里田原遺跡	舶	弥生後期	—	方格規矩鏡（破鏡）	平戸市田平町里免	遺物包含層	—
	5	5-12	栢ノ木２号墳	舶	弥生後期	10.4	内行花文鏡	松浦市志佐町栢ノ木免小久保	箱式石棺（2号石棺）	3
	6	6-14	勝負田古墳	舶	古墳前期後半から中期	13.8	長宜子孫内行花文鏡	平戸市大島町	箱式石棺？	2
	7	7-24	岩谷口岩陰遺跡	倭	古墳前期から中期	9.8	内行花文鏡	佐世保市世知原町	1区第3層	27
	8	－	*白土遺跡（伝）*	*？*	*不明*	—	*不明*	*松浦市福島町*	*不明*	
ソノキ	9	5-3	門前遺跡	舶	弥生後期	10	方格規矩鏡？（破鏡？）	佐世保市	遺物包含層	4
	10	5-6	武辺城跡	舶	弥生後期	10	方格規矩鏡（破鏡？）	佐世保市宮津	遺物包含層	5
	11	5-7	白井川遺跡	舶	弥生後期	15	方格規矩鏡ないし獣帯鏡（破鏡？）	東彼杵町	遺物包含層	6
	12	5-10	竹松遺跡	舶	弥生後期	5.5～16.	細線式獣帯鏡（破鏡）	大村市	竪穴建物床面20cm上の覆土	9
	13	5-2	立小路遺跡	舶	弥生後期	—	異体字銘帯鏡ないし方格規矩鏡片（破鏡）	大村市	4区3層	8
	14	6-16	竹松遺跡	倭	弥生後期	7.4	内行花文鏡（完形鏡）	大村市	TAK201302①区包含層（旧河川）	9
	15	6-13	冷泉遺跡３号石棺	舶	古墳初頭	—	内行花文鏡（破鏡）	大村市今富町	箱式石棺　3号石棺付近	7
	16	7-26	竹松遺跡	倭	古墳初頭～前期	—	鈕片（破鏡）	大村市	TAK201302⑦区旧表土	9
	17	7-28	鬼塚古墳	倭	古墳中期	11.5	四獣鏡（完形鏡）	佐世保市宮津	竪穴系横口式石室	10
	18	7-27	ひさご塚古墳第2主体部	倭	古墳中期	7.4	捩文鏡（完形鏡）	東彼杵町	石棺系横口式石室	11
	19	－	前島1号墳	倭	古墳後期	9.5	不明	西彼杵郡時津町	円墳・横穴式石室	12
タカク	20	－	景華園遺跡甕棺（伝）	？	弥生中期	—	不明	島原市中野町高城元（伝）	標石墓・甕棺	13
	21	6-18	今福遺跡Ｂ－3・4区 1号溝	倭	弥生後期	7.5	不明	南島原市北有馬町	溝	20
	22	6-19	今福遺跡Ｂ－3・4区 1号溝	倭	弥生後期	7.8	不明	南島原市北有馬町	溝	20
	23	－	高原遺跡	倭	弥生後期	—	破鏡	南島原市有家町	溝	—
	24	6-17	佃遺跡	倭	弥生後期	7.6	内行花文鏡（完形鏡）	雲仙市国見町	住居跡	21
	25	7-30	大屋敷遺跡	？	弥生後期？	8.6	不明	雲仙市小浜町山 畑大屋敷上中谷	包含層（第2層）	16
	26	5-4	上原遺跡（有喜）	舶	古墳初頭	—	鳳龍文鏡か内行花文鏡（破鏡）	諫早市有喜	竪穴住居周壁上端	15
	27	6-22	山の寺遺跡	倭	古墳前期から中期	5.8	重圏文鏡（完形鏡）	南島原市深江町	表採	17
	28	6-20	諫早邑（伝）	倭	古墳前期	15.8	鼉龍鏡（完形鏡）	諫早市	伝承	18
	29	6-23	遠目塚1号石棺	倭	古墳中期から中期	8.3	内行花文鏡	雲仙市南串山町	箱式石棺	19
	30	6-15	高下古墳	舶	古墳後期	8.6	方格T字鏡（完形鏡）	雲仙市国見町多比良字岩名丁	横穴式石室	22.23
	31	－	*飯盛鬼塚古墳*	*？*	*古墳前期～中期？*	—	*不明*	*諫早市飯盛町*	*不明*	
	32	－	*塚田（伝）遺跡*	*？*	*和鏡？*	—	*不明*	*南島原市北有馬町*	*墳墓*	
	33	－	*山ノ内遺跡（伝）*	*？*	*不明*	—	*不明*	*南島原市有家町*	*不明*	
	34	－	*蒲河鬼塚古墳（伝）*	*？*	*不明*	—	*不明*	*南島原市有家町蒲河*	*不明*	
	35	－	*下釜墳墓群*	*？*	*不明*	—	*不明*	*諫早市飯盛町*	*墳墓*	
スカ	36	5-9	万才町遺跡	倭？	弥生後期から古墳初頭	—	（破鏡）	長崎市		25
	37	6-21	万才町遺跡	舶？	古墳前期から中期	6.4	（斜縁）四獣鏡　完形鏡	長崎市		24
	38	7-29	万才町遺跡	倭	古墳前期から中期	7.4	素文鏡（完形鏡）	長崎市		25
	39	7-25	宮田Ａ－１号石棺	倭	古墳前期から中期	6.8	珠文鏡（完形鏡）	長崎市下黒崎町	箱式石棺	26

凡例

	舶載鏡
斜文字	不明鏡

いる（古門 2023）。さらに、この時期の地域集団の動向で注目されることは、第 6 図に示したように本県本土部において最も古い前方後円墳である守山大塚古墳（第 6 図 7）が有明海沿岸地域に出現する一方で、有明海沿岸と島原湾沿岸の各地域集団があたかも消えてしまったかのように見えることである。同様にマツラも九十九島沿岸地域の地域集団が消えている。しかしながらソノキは依然として地域集団の分立状態を呈しているように見える。このような地域集団の動向を見ると、タカクは守山大塚古墳の被葬者によって平定、統一され、マツラは里田原遺跡を本貫地とした笠松天神社古墳や岳崎古墳の系譜に連なる被葬者によって平定、ないしは統一されたのではないかと想像してしまう。少なくとも考古学的事実からは、古墳時代初頭に本県本土部でも倭王権ないし、地元有力集団を含めた連合体により、タカクやマツラの地域集団の統合や平定が進んだ一方で、ソノキは依然として地域

表３　長崎県本土部の遺構から出土した鉄製品（弥生時代中期後半から古墳時代前期）文献は本稿末に掲載

遺跡名	所在地	遺跡番号・調査区	遺構番号	時期	金属器	文献
里田原遺跡	平戸市	坂ノ下地区弥生墓地	2号カメ棺	後期中頃	鉄鉇	15
里田原遺跡	平戸市	坂ノ下地区弥生墓地	4号石棺	後期中頃	鉄剣	15
中野ノ辻遺跡	平戸市	―	7号石棺	古墳初頭	刀子	16
門前遺跡	佐世保市	―	1号石棺	弥生終末から古墳初頭	鉄剣	18
門前遺跡	佐世保市	―	2号石棺	弥生後期～古墳初頭	素環頭刀子	18
門前遺跡	佐世保市	―	3号石棺	弥生後期～古墳初頭	素環頭刀子	18
門前遺跡	佐世保市	―	4号石棺	弥生後期～古墳初頭	素環頭刀子	18
門前遺跡	佐世保市	―	1号土坑墓	弥生後期～古墳初頭	素環頭刀子	18
門前遺跡	佐世保市	C-9-19区	SX6	弥生後期	鉄鏃	18
門前遺跡	佐世保市	C-9-24区	河川跡	弥生後期	袋状鉄斧	18
門前遺跡	佐世保市	C-9-20区	SR9（河川跡）	弥生時代後期後半	袋状鉄斧	19
白井川遺跡	東彼杵町	―	1号竪穴建物跡	後期終末	鉄鏃	4
白井川遺跡	東彼杵町	―	1号竪穴建物跡	後期終末	鉄鉋	4
竹松遺跡	大村市	TAK201408	SC01	後期前半	釣針	2
竹松遺跡	大村市	TAK201303A5	SC1	後期前半	鉄鏃	2
竹松遺跡	大村市	TAK201303B1	SC124	後期前半	棒状鉄製品	2
竹松遺跡	大村市	TAK201404B6東	SC4	後期前半	鉄鏃?	2
竹松遺跡	大村市	TAK2015062区	SC15	弥生後期後半～終末	袋状鉄斧	20
竹松遺跡	大村市	TAK2015062区	SC15	弥生後期後半～終末	鉄鏃	20
冷泉遺跡	大村市	―	3号石棺	古墳初頭	素環頭刀子	10
冷泉遺跡	大村市	―	3号石棺	古墳初頭	鉄鏃	10
冷泉遺跡	大村市	―	5号配石墓	古墳初頭	鉄鏃	10
川端遺跡	大村市	KBT2018A区	ST03	弥生終末～古墳初頭	刀子	21
西ノ角遺跡	諫早市	B25-26区	―	後期後葉	鉄鎌	7
本明石棺群	諫早市	―	石棺	古墳初頭から同前期	刀子	―
中江遺跡	諫早市	―	2号石棺	古墳初頭から同前期	刀子	17
上原遺跡	諫早市	―	2号竪穴建物跡	古墳初頭から同前期	刀子	14
上原遺跡	諫早市	―	2号竪穴建物跡	古墳初頭から同前期	鉄滓	14
林ノ辻遺跡	諫早市	―	1号石棺	古墳初頭	鉄鉇	12
林ノ辻遺跡	諫早市	―	2号石棺	古墳初頭	鉄鉇	12
十園遺跡	雲仙市	26区	SD02	弥生終末から古墳初頭	鉄鏃	11
高原遺跡	南島原市	―	溝	後期	素環頭刀子	―
今福遺跡	南島原市	C9-10区	覆土	終末～古墳初頭	鉄斧・鉄鉇	8

凡例　SC:竪穴建物跡
SD:溝
ST 墓

集団の独立性が強かったことを示していると言えよう（註9)。

（４）古墳時代後期の地域集団

古墳時代後期の地域集団の抽出にあたっては、本来古墳の墳丘規模や石室規模、副葬品などを用いた指標が望ましいが、現状では本県本土部に横穴式石室墳自体が少ないことに加えて、後世の毀損や破壊があり、やむを得ず古墳の玄室の床面積を指標とした（第８図、表5)。その場合、鏡か玄室

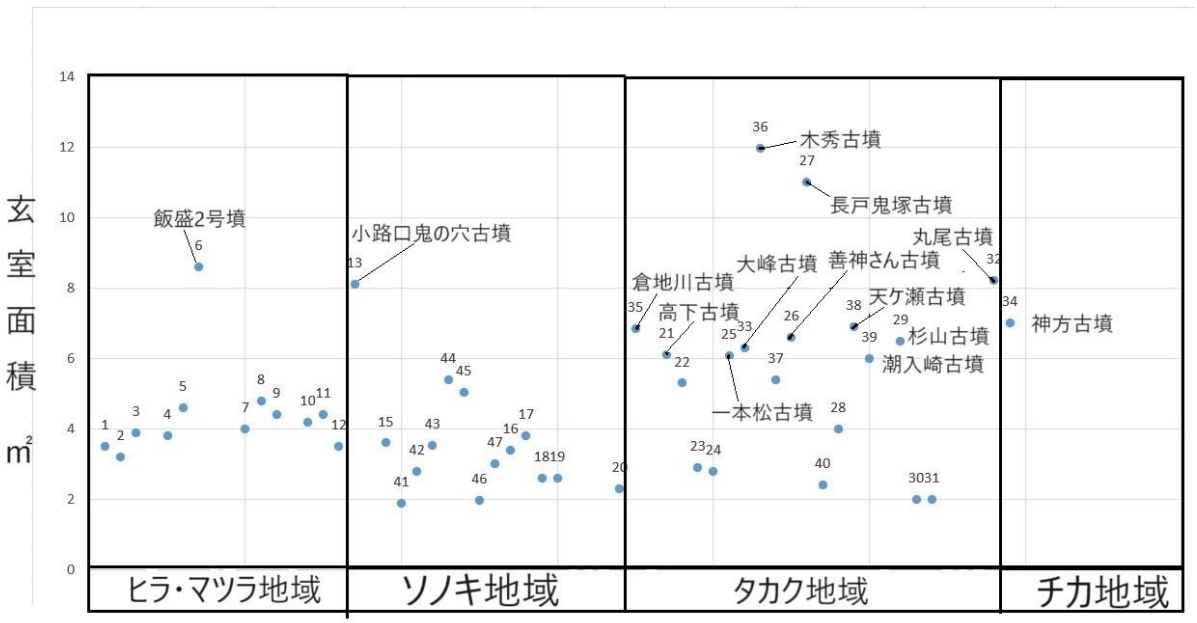
表４　長崎県本土部の遺構から出土した刀剣一覧（古墳時代中期）文献は本稿末に掲載

No	遺跡名	所在地	遺跡番号・調査区	遺構番号	時期	金属器	文献
1	松ヶ崎古墳	佐世保市		ST（箱式石棺）	古墳時代中期	鉄刀1	1
2	鬼塚古墳	佐世保市		ST（石棺系石室）	古墳時代中期	鉄剣片	2
3	小佐古石棺１号	大村市		ST（箱式石棺）	古墳時代中期	鉄剣1	3
3	小佐古石棺9号	大村市		ST（箱式石棺）	古墳時代中期	鉄刀	3
4	黄金山古墳	大村市		ST（石棺系石室）	古墳時代前期～中期初頭	（鉄刀）	4
5	小野古墳	諫早市		ST（石棺系石室）	古墳時代中期	鉄剣1	5
6	開遺跡	長崎市		ST（箱式石棺）	古墳時代中期	鉄剣1、鉄刀2、鉄鏃5、刀子2	6
7	ひさご塚古墳	東彼杵町		ST（石棺系石室）	古墳時代中期	鉄剣1	7
8	一野3号墳	雲仙市		ST（石棺系石室）	古墳時代中期	鉄刀片	8
8	一野6号墳	雲仙市		ST（箱式石棺）	古墳時代中期	鉄刀	8

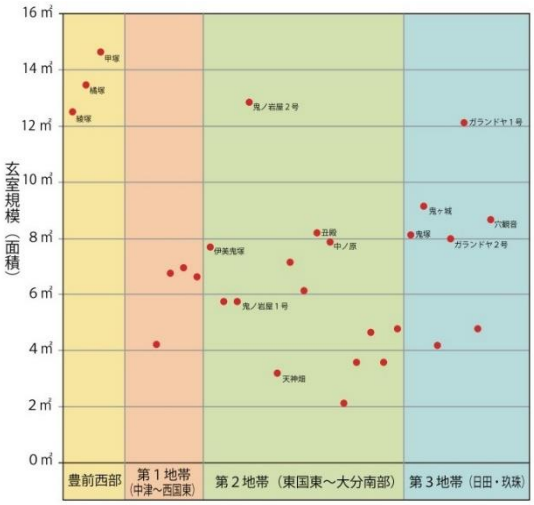
凡例　SC:竪穴建物跡
SD:溝
ST 墓
（　　）は伝聞

表５　長崎県本土部の横穴式石室一覧

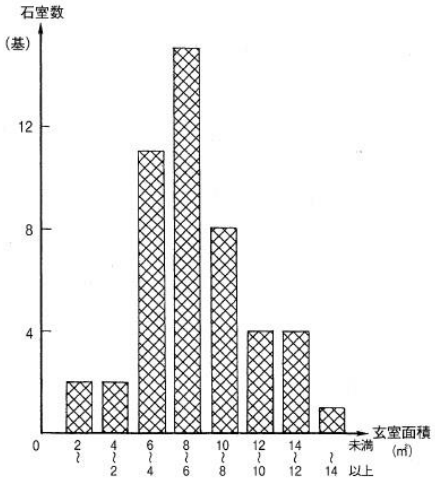
地域		No	古墳名	所在地	玄室長	玄室幅	玄室面積	玄室高	文献
マツラ	ヒラ	1	湯牟田古墳	度島（平戸市）	2.1	1.65	3.5	0.3～0.4+α	9
		2	崎瀬古墳	度島（平戸市）	2.3	1.4	3.2	?	9
		3	竪山古墳	度島（平戸市）	2.2	1.7	3.9	0.75+α	9
			壱銭替古墳	度島（平戸市）	—	—	—	—	9
		4	山口古墳	度島（平戸市）	2.35	1.6	3.8	0.8+α	9
		5	飯盛1号	度島（平戸市）	2.3	2	4.6	?	9
		6	飯盛2号墳	度島（平戸市）	3.6	2.4	8.6	?	9
			中の原古墳	度島（平戸市）	—	—	—	—	9
			川内古墳	度島（平戸市）	—	—	—	—	9
		7	岳ノ下古墳群2号墳	的山大島（平戸市）	2	2	4		8
		8	上骨棒古墳	生月（平戸市）	3.2	1.5	4.8	?	9
		9	山田古墳（富永古墳）	生月（平戸市）	2.6	1.7	4.4	1.2+α	9
			横島古墳	福島町（松浦市）	—	—	—	—	
		10	宝ヶ峰古墳群1号墳	鷹島（松浦市）	2.45	1.7	4.2	2+α	16
		11	宝ヶ峰古墳群2号墳	鷹島（松浦市）	2.2	2	4.4	2.7	16
		12	小嶋古墳群1号墳	松浦市	2.3	1.5	3.5	0.7+α	1
ソノキ		13	小路口鬼の穴古墳	大村市	2.85	2.85	8.1	2	3
			地堂古墳	大村市	—	—	—	—	—
		15	玖島崎古墳群0号（県1号）	大村市	2	1.8	3.6	?	17
		41	玖島崎古墳群1号（県2号）	大村市	1.9	1	1.9		17
		42	玖島崎古墳群2号（県3号）	大村市	2	1.4	2.8		17
		43	玖島崎古墳群4号（県4号）	大村市	2.2	1.6	3.52		17
		44	玖島崎古墳群6号（県5号）	大村市	3	1.8	5.4		17
		45	玖島崎古墳群7号（県7号）	大村市	2.8	1.8	5.04		17
		46	玖島崎古墳群8号（県10号）	大村市	2.2	0.9	1.98		17
		47	玖島崎古墳群10号（県9号）	大村市	2	1.5	3		17
		16	テボ神古墳	佐世保市	1.9	1.8	3.4	?	16
		17	野田古墳群1号墳	大村市	2	1.9	3.8		16
		18	野田古墳群2号墳	大村市	1.6	1.6	2.6		16
		19	野田古墳群3号墳	大村市	1.6	1.6	2.6		16
			上杉古墳群	東彼杵町	—	—	—	—	—
			上小路口古墳	大村市	—	—	—	—	18
			八竜古墳	大村市	—	—	—	—	18
		20	前島古墳群3号	時津町	1.75	1.3	2.3	1.3+α	5
タカク		35	倉地川古墳	国見町（雲仙市）	3.6	1.9	6.84	—	19
		—	江崎古墳群		—	—	—	—	—
		21	高下古墳	国見町（雲仙市）	3.3	2.8	6.1	2.8	14
		22	八反田古墳	国見町（雲仙市）	2.4	2.2	5.3	1.6＋α	16
		23	飯盛鬼塚古墳	飯盛町（諫早市）	2.1	1.4	2.9	?	2
		24	柿ノ本古墳	瑞穂町（雲仙市）	2	1.4	2.8	?	13
		25	一本松古墳	愛野町（雲仙市）	3.2	1.9	6.08	?	12
		33	大峰古墳	高来町（諫早市）	3	2.1	6.3		19
		36	木秀古墳	諫早市	4.6	2.6	11.96		20
		37	尾首鬼塚古墳	諫早市	3	1.8	5.4		20
		26	善神さん古墳	諫早市（高来町）	2.2	3	6.6	2.1	20
		27	長戸鬼塚古墳	諫早市（小長井町）	4.3	2.5	11	3.2	7
		40	椿川3号墳	諫早市（森山町）	1.2	2	2.4		20
		28	平山古墳	島原市	2	2	4	1+α	20
		38	天ケ瀬古墳	南島原市（布津町）	3	2.3	6.9		20
		39	潮入崎古墳	南島原市（布津町）	3	2	6		20
			原尾古墳	南島原市（有家町）	—	—	—	—	20
		29	杉山古墳	雲仙市（吾妻町）	2.6	2.5	6.5		15
		30	曲崎古墳群2号墳	長崎市	1.92	1	2	1.3+α	16
		31	曲崎古墳群3号墳	長崎市	2.5	0.8	2	?	16
			一野古墳群	島原市	—	—	—	—	—
			首塚古墳	雲仙市（愛野町）	—	—	—	—	—
			稲荷鬼塚古墳	雲仙市（愛野町）	6.3	—	—	—	—
		32	丸尾古墳	小長井町（諫早市）	3.42	2.4	8.208	2.45	6
チカ		34	神方古墳	小値賀町	3.5	2	7		16
			水ノ下古墳	小値賀町	—	—	—	—	—
スカ		—	—	—	—	—	—	—	—



第 8 図　長崎県本土部の横穴式石室の玄室面積の散布図（番号は表 5 のそれと同じ）



第 9 図　大分県の横穴式石室玄室面の散布図
（別府市教委編 2016）



第 10 図　高知県の横穴式石室玄室面積の柱状図
（清家 2006）

床面積 6 平方㍍以上の横穴式石室墳を地域集団の指標とした。その結果、16 の地域集団の存在が想定できた（第 7 図）。16 の地域集団のうちタカクの有明海沿岸地域に半数の 8 集団が集中していることは前代とは異なりきわめて特徴的である。子細に見ると野澤（竹中）哲朗が指摘するように同地域は有明海をまたいで南北に分かれるようである（竹中 2014）。また、島原湾沿岸地域および橘湾沿岸地域にも複数の地域集団が確認できる。この 2 地域は有明海沿岸地域の北部（旧北高来郡）と併せて、前代の古墳時代前期から中期には地域集団が空白となっていた地域である。このように古墳時代後期になって地域集団の数が回復した背景には何があったのか注目される。

また第 8 図の玄室床面積の散布図を子細に見るとタカクと、ソノキ・マツラ・ヒラでは著しく散布状況が異なっていることが分かる。具体的には 6 平方㍍から 8 平方㍍の玄室床面積をもつ古墳が後

者の地域では存在せず抜け落ちているのである。このように玄室床面積の特定の範囲だけが欠落しているのは不自然であり、古墳築造の際に何らかの外的規制や自己規制がかかっていた可能性も考えられる。清家 章は高知平野の横穴式石室の玄室床面積を基準に玄室面積が 14 平方㍍以上の特大型石室、10 平方㍍以上の大型石室、4 平方㍍以上、10 平方㍍未満の標準型石室、4 平方㍍未満の小型の石室に分類し、それぞれ当時の社会階層が反映されたものと指摘している（清家 2010）。

清家によると、それぞれの玄室面積の被葬者の社会階層は、大型石室が河川や丘陵で区画される領域を代表するレベルの地域首長で、特大型石室はさらに広い領域（平野レベルなど）を代表する首長、標準型石室は、大型石室の差配する領域内に複数存在することからさらに下のレベルの小首長と考えられるとしている（清家前掲）。第 9 図は大分県の横穴式石室の玄室面積の散布図で、第 10 図は高知平野の散布図であるが、両者ともに 6〜8 平方㍍のところにピークがあり、同じような散布状況を示す。

一方、本県本土部の横穴式石室の玄室面積の散布図（第 8 図）を見ると、タカクのそれは 6〜8 平方㍍のところにピークがあり、大分や高知の散布図に近いが、前述のようにソノキ・マツラ・ヒラでは 6〜8 平方㍍の玄室が散布図から完全に抜け落ち、4 平方㍍前後の小型の玄室が極めて多いという特異な散布状況を示す。清家の分類に従えば標準型の石室が欠落し、4 平方㍍未満の小型の石室が極めて多いという特徴をもつ。このことは古墳時代後期の当地の社会階層の有り様を反映していると見られるが、前述したように石室構築にあたって何らかの外的規制や自己規制があったことも考えられる。当地では古墳時代中期まで箱式石棺への埋葬習慣が根強く残っていたので、玄室の築造や葬送祭祀にあたって、追葬したとしても極めて少人数であった箱式石棺を用いた埋葬の伝統に縛られたとも推測される。いずれにしても今後の研究課題である。これまでのように地域集団の規模が小さいからとか、可耕地が少ないがゆえの農業生産力の低さによる経済力が反映されたものという理由では片付けられないような背景があると考える。例えば被葬者が海人、海民、船上生活者など海に生活の糧を求める集団の出自であることを想定してのアプローチも必要ではないかと考える（註 10）。

一方この時期に、これまで無古墳地帯であったチカ（五島列島）の小値賀島に横穴式石室を持つ古墳が出現することも注目される。同地域は前代まで地域集団の痕跡がなく、まさに突如出現した感がある。したがって古墳出現の要因を島内社会に見出すことは困難で、島外の要因に起因するものと考えざるをえない（註 11）。

この時期の鏡の分布をみる限り、舶載鏡とされる鏡はタカクの有明海沿岸地域南部の高下古墳（第 7 図 6）に存在するのみで、この地域が他地域に対し圧倒的な存在感を示し、同古墳を造営した地域集団が唯一の有力集団とも言うべき状況である。前代までの地域集団の分布とは大きく異なっており、前述のように有明海沿岸地域に地域集団が集中しているほか、マツラ地域で地域集団の姿が消え、ヒラの度島（たくしま）という島嶼に移るなど、大きな社会変化が起こったことを推測させる（註 12）。

４　弥生時代中期から古墳時代にかけての地域集団の動向

ここまで各時代の地域集団に鏡の分布を重ね合わせ検討してきたが、全時代を通じて地域集団や有力集団が存在するのはマツラの壱岐水道沿岸地域とソノキの大村湾東岸地域、タカクの有明海沿岸地域である。したがって、この 3 つの地域集団が本県本土部にあって継続的に存続してきたものと考える。

ただし、古墳時代後期になるとこれら3地域の地域集団のあり方はそれまでの時代と大きく異なっている。古墳時代後期は、全国的にこれまで古墳を作れなかった階層が古墳を造営するようになった、いわゆる群集墳が出現した時代である。タカクの古墳玄室床面積の散布図（第8図）の様相は他県の地域と近似しており、同じような社会階層であったと推定できる。一方でソノキやマツラの地域は散布図の様相がタカクとは異なっており、社会階層や社会構造に違いがあったか、あるいは古墳築造にあたって何らかの規制や制限が働いていた可能性も否定できない。

一方、マツラの壱岐水道沿岸地域は古墳時代に入って地域集団が減少し、後期になっても回復しなかったことが分かる。逆にヒラは古墳時代後期になって県北部唯一の地域集団が存在するなど異彩を放つ。一方でソノキの大村湾東岸地域は弥生時代後期から古墳時代中期まで複数の地域集団が存在し、独立性も高かったと見られるが、マツラ、タカクに遅れる形で、古墳時代後期にその姿を消している。その背景には倭王権やその連合体による地方支配の進展が想定される。さらにマツラの九十九島沿岸やソノキの大村湾西岸は地域集団の存在が一過性でその後継続していないことが見て取れる。

またでチカにおいては古墳時代後期に至ってはじめて古墳が出現するが、それ以前に地域集団の痕跡はなく、墓制においてもそれまでは弥生時代的な共同墓地であったことから（古門 2022）、外的要因によって古墳が出現したと評価した。なお西彼杵半島西岸の角力灘（五島灘）沿岸地域は、古墳時代前期後半から中期までに鏡や刀剣が集中する地域であり、この背景には倭王権の朝鮮半島への軍事進出があったであろうことは既に別稿で述べた通りである（古門 2023）。

５　まとめにかえて－長崎県内本土部各地の地域集団の動向－

以上の考察から、弥生時代中期から古墳時代後期にかけて本県本土部で中心的な役割を果たした地域集団は、マツラの壱岐水道沿岸地域、ソノキの大村湾東岸地域、タカクの有明海沿岸地域の３つの地域集団や有力集団であることが判明した。長崎県本土部で弥生時代のクニを想定するならば、まずこの3地域が候補となるであろう。

以下、地域ごとに本県本土部の地域集団の動向をあらためて概観する。

（1）　マツラの地域集団

弥生時代中期から古墳時代中期まで壱岐水道沿岸地域に里田原遺跡を中心とした有力な地域集団が存在した。一方で弥生時代中期から後期までは久保園遺跡や栢ノ木遺跡などいわゆるシサ（志佐）の地域にも地域集団が存在したことが分かる。同じく弥生時代後期にマツラ南部の門前遺跡などに同集団の存在をみるが、一時的な存続であった。古墳時代前期から中期においては里田原遺跡を本貫地とする笠松天神社古墳や岳崎古墳被葬者による地域支配が進展したと推測する。しかし古墳時代後期には当地に目立った地域集団は存在していないように見える。

（2）　ソノキの地域集団

弥生時代中期から大村湾東岸に地域集団が存在するが、大きくは現在の川棚・彼杵といったソノキ北部と大村市を中心としたソノキ南部に分立していたと思われる。この状況は古墳時代前期に地域集団が減じたマツラやソノキとは異なり、古墳時代中期まで継続しており、古墳時代後期になって、ようやくソノキ南部に集約される形になる。

（3）　タカクの地域集団

弥生時代中期の島原湾沿岸地域に景華園遺跡を中心とする有力集団が存在したが、後期になると同集団は衰退し、地域の中心は南部に移り、有明海沿岸地域と対峙したかのように見える。

一方で橘湾沿岸にも上原遺跡を中心にした地域集団が存在したが、古墳時代前期に守山大塚古墳の出現により、島原湾沿岸、橘湾沿岸の地域集団は消滅し、有明海沿岸地域のみとなる。しかしながら古墳時代後期になると島原湾沿岸地域と橘湾沿岸に再び地域集団が出現する（註 13）。

また、有明海沿岸地域は南北に分立したように見え、野澤が指摘する「タカクの二面性」が顕在化したと理解される。

（4） ヒラの地域集団

島嶼でありながら弥生中期を除く期間を通じて独特の存在感を示す。弥生時代後期から古墳時代中期にかけて田助遺跡や勝負田古墳のように舶載の後漢鏡を在地系の箱式石棺や石棺系石室に副葬した地域集団の存在があり、独自の外交ルートを通じて舶載鏡を入手していた可能性もある。続く古墳時代後期には本県本土部で３番目に広い玄室を持つ横穴式石室を構築する地域集団が存在しており、このような当地の経済的基盤は海に求められるものの詳細については今後の研究課題である。

（5） チカの地域集団

弥生時代中期から古墳時代中期までは顕著な地域集団の存在は見られない。古墳時代後期になって横穴式石室が築造され、当地の墓制が、これまでの弥生時代的な共同墓地から大きく変化している。変化の要因を地域内に求めることは難しく、外的要因を考慮せざるを得ない。

（6） スカの地域集団

弥生時代中期末には地域集団の存在が認められ、古墳時代中期まで継続している。その間の詳細は発掘調査例が少ないため、今後の資料の蓄積を待たざるを得ないが、古墳時代前期後半から中期にかけて鏡や鉄製武器が集中しており、倭王権や倭王権と親和的な勢力による朝鮮半島への軍事進出に協力的な地域集団の存在が想定される。

おわりに

長崎県本土部の地域集団の動向を可視化すべく本稿を執筆したが、どこまで歴史的事実を正確に復元できたか、はなはだ心許ない。しかし、本県ではこれまでこのような試みがなされなかったがゆえに、筆者自身も、いつかどなたかが書いてくださることを待望していたテーマであった。筆者の希望はかなわなかったが、拙稿を契機に今後それぞれの地域の文化財担当者の方々のご批評をいただいて、さらに考古学資料に基づいた客観的な歴史を通史として復元していかなければならないと考えている。

本稿を執筆するにあたり、竹田ゆかり、立谷聡明、馬場聖美、宮﨑貴夫、宮下雅史、山梨千晶、渡邊康行の各氏にお世話になった。芳名を記し感謝申し上げる。

2023（令和 5）年 11 月 25 日　脱稿

【註】

註 1　具体的には、多良岳南麓に長方形プランの玄室を持つ横穴式石室墳が分布し、筑後川流域との関係が窺えること。島原半島北部から東岸は正方形プランの玄室で石障をもつ横穴式石室墳が分布し、菊池川・白川流域の影響が窺われること。橘湾沿岸では礫丘上に小規模な横穴式石室と箱式石棺が築かれるようになり、海人集団の存在が窺われるとしている（竹中 2014）。

註 2　諫早農業高校遺跡（立石遺跡）では同校造成の際に甕棺と細形銅剣が出土し、現在銅剣は長崎県埋蔵文化財センターで保管されている。当時出土した甕棺は現存しないが、青銅器の出土からみて北部九州系大形成人用甕棺の存在を想定し、分布図に加えている。

註 3　別稿で指摘したように景華園遺跡から鏡が出土したのは確実のようだが、甕棺から出土したのかどうかが定かではない（古門 2023）。

註 4　有明海沿岸地域に関して、野澤（竹中）哲朗は有明海を挟んで、多良岳南麓地域（旧北高来郡）と島原半島側地域に分け、タカクの「二面性」と呼んだ（竹中 2014）。筆者は有明海を大村湾と同様に内湾と見なし、古墳時代中期までは対岸の両地域は文化的に一体の地域と見なしてよいのではないかと考えている。したがって野澤が言う「二面性」は古墳時代後期から顕在化したと考える。

註 5　九州大学の辻田淳一郎先生から長崎市万才町遺跡出土の（斜縁）四獣鏡は鏡式が四禽文鏡で舶載鏡の可能性があるとのご教示を得た。

註 6　辻田淳一郎は鏡の価値付けの問題に関して，弥生時代後期では，舶載鏡＞弥生小形倭製鏡であるが，古墳時代の当初こそ舶載鏡重視であるものの，古墳時代前期の比較的早い段階で，倭製鏡の大型鏡重視へと転換したと主張する。これは，輸入品としての舶載鏡のストックが減少したことが大きく，あわせて倭製鏡の大型化に価値を見出す形へと転換した可能性が高いとする（辻田 2019）。

註 7　既に対馬における尾上博一の指摘がある（尾上 2005）。

註 8　開遺跡は昭和 50 年代の不時発見により緊急調査されたが、諸般の事情により、最低限の情報が公にされたのみで、学界でもさほど知られていない現状がある。

註 9　野澤（竹中）哲朗は「島原半島北部は、古墳時代において、前方後円墳や豪族居館の造営がスムーズに行われた地域であり、高来地域の中でも初期のヤマト政権にいち早く組み込まれたものと思われる。」と主張している（竹中 2014 p. 47）。本稿の地域集団の検討結果は野澤の見解を支持するものである。

註 10　そのような意味で、野澤が古墳時代後期の橘湾沿岸地域の古墳の検討から被葬者を海人集団と見ていることは傾聴に値する（竹中 2014）。

註 11　例えば神方古墳の被葬者は、日本と中国の航海路開発や整備に従事するため、倭王権から派遣された人物の可能性などが考えられる。

註 12　この変化にもっとも適合する歴史的事件は 527 年の筑紫君磐井の乱であり、この乱によってそれまでの地域集団間の政治秩序が崩壊し、倭王権による地方支配の強化に伴い、地域集団のあり方が前代とは大きく変化したと推測される。

註 13　特に橘湾沿岸地域の木秀（きしゅう）古墳が注目される。現状では本県本土部で最も広い玄室を持ち、馬具を副葬していた。本県本土部で馬具が副葬された古墳は高下古墳（雲仙市）、一本松古墳（雲仙市）と木秀古墳（諫早市）のみで、いずれもタカクの地にある。

【引用・参考文献】

尾上博一 2005「前方後円墳築造周縁域としての対馬」『西海考古』第 6 号　正林護先生喜寿記念号　西海考古同人会

木下尚子 1996『南島貝文化の研究』貝の道の考古学　法政大学出版局

京都大学平戸学術調査団編 1951『平戸学術調査報告』京都大学平戸学術調査団

外海町教委編 1985『宮田古墳群』外海町文化財調査報告第 3 集　外海町教育委員会

清家 章 2010「7 横穴式石室にみる南四国太平洋沿岸地域の関係」『弥生古墳時代における太平洋ルートの文物交

流と地域間関係の研究』2006(平成18)年度～2009(平成21)年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書(課題番号18320128)
立谷聡明2020「弥生時代の九州地方における鉄製武器の普及－武器の消費傾向からみた生産と流通にかんする予察－」『古代武器研究』Vol.16　古代武器研究会・山口大学考古学研究室
竹中哲朗2014「高来地域」『長崎県本土地域における古墳の様相』平成26年度　長崎県考古学会秋期大会資料　長崎県考古学会
辻田淳一郎2019『鏡の古代史』株式会社KADOKAWA　角川選書
中尾篤志2005「鯨骨製アワビオコシの拡散とその背景」『西海考古』第6号　西海考古同人会
東彼杵町教委編1990『白井川遺跡Ⅱ』東彼杵町文化財調査報告書第4集　東彼杵町教育委員会
東彼杵町教委編1991『ひさご塚古墳』東彼杵町文化財調査報告書第5集　東彼杵町教育委員会
東彼杵町教委編1994『ひさご塚古墳（Ⅱ)』東彼杵町文化財調査報告書第6集　東彼杵町教育委員会
古門雅高2020「大形成人用甕棺墓分布周縁地域の社会－長崎県本土部の弥生時代社会－」『西海考古』第11号　西海考古同人会
古門雅高2022「前方後円墳分布周縁地域の社会－長崎県本土部の古墳時代前期および中期を中心に－」『西海考古』第12号　西海考古同人会
古門雅高2023「西海の鏡」https://saikaikouko.jp/manpitusakuhin/kagami.pdf
別府市教委編2016「第5章　総括」『実相寺古墳群－別府の大型横穴式石室墳に関する総括調査報告書－』別府市埋蔵文化財発掘調査報告書　第８集　別府市教育委員会
宮崎貴夫2019『長崎地域の考古学研究』自費出版

【本文表中の文献一覧】

表2　長崎県本土部出土鏡一覧　文献

1 田平町教委編2003『里田原遺跡』国営再編整備事業にかかる第37・40・41・44・46次発掘調査の報告　田平町文化財報告書第9集　田平町教育委員会
2 京都大学平戸学術調査団 151　『平戸学術調査』京都大学平戸学術調査団
3 正林護　編1973『 栢ノ木遺跡（中間報告)』松浦市教育委員会
4 長崎県教委　編2006『門前遺跡』長崎県文化財調査報告書 第190集　長崎県教育委員会
5 佐世保文化財調査事務所　編2010『門前遺跡Ⅲ・武辺城跡Ⅱ』佐世保文化財調査事務所文化財**調査事務所調査**報告書第5集　長崎県教育委員会
6 東彼杵町教委　編1990『白井川（Ⅱ)』　東彼杵町文化財調査報告第4集　東彼杵町教育委員会
7 大村市教委　編2003『黒丸遺跡ほか発掘調査概要』Vol. 大村市文化財調査報告書 第25集　大村市教育委員会
8 長崎県教委　編2018『立小路遺跡』都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　長崎県文化財調査報告書第216集　長崎県教育委員会
9 新幹線文化財調査事務所　編　2018『竹松遺跡Ⅲ』 新幹線文化財調査事務所調査報告書 第6集　長崎県教育委員会
10 佐世保市教委　編 2019『鬼塚古墳』佐世保市文化財調査報告書第17集　佐世保市教育委員会
11 東彼杵町教委　編 1994『ひさご塚古墳（Ⅱ)』東彼杵町文化財調査報告書第6集　東彼杵町教育委員会
12 時津町教委　編1991『前島古墳群』時津町文化財調査報告書第1集　時津町教育委員会
13 岡崎敬　編1979『日本における古鏡 発見地名表 九州地方Ⅰ』東アジアより見た日本古代墓制研究（増補改訂版）
14 岡崎敬　編1974　長崎県・佐賀県・熊本県における「古鏡」発見地名表稿　九州文化史研究所紀要（通号 19）

九州大学文学部考古学研究室
15 諫早市教委　編 2007『諫早市文化財調査年報Ⅰ』諫早市文化財調査報告書第 20 集　諫早市教育委員会
16 長崎県教委　編 1989「大屋敷跡」長崎県埋蔵文化財調査集報 XI 長崎県教育委員会
17 深江町教委　編 2006『権現脇遺跡』深江町文化財調査報告書第 2 集　深江町教育委員会
18 杉本欣久 2016「江戸時代における古美術コレクションの一様相－古鏡の収集と出土情報の伝達－」『古文化研究』第 15 号　黒川古文化研究所
19 長崎県教委　編 1978「遠目塚遺跡の調査」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅰ　長崎県文化財調査報告書第 35 集　長崎県教育委員会
20 長崎県教委　編 1985『今福遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第 77 集　長崎県教育委員会
21 雲仙市教委　編 2013『佃遺跡Ⅱ』雲仙市文化財調査報告書第 12 集　雲仙市教育委員会
22 国見町教委　編 1959『高下古墳』国見町教育委員会
23 小田富士雄 1979「第 16 章　長崎県高下古墳」『九州考古学研究』古墳時代編　小田富士雄著作集 2　学生社
24 長崎市史編さん委員会　編 2013『新長崎市史』第 1 巻　長崎県教育委員会
25 長崎県教委　編 1995『万才町遺跡』長崎県文化財調査報告書第 123 集　長崎市
26 外海町教委　編 1985『宮田古墳群』外海町文化財調査報告書第 3 集　外海町教育委員会
27 片岡肇　編 1976　岩谷口遺跡群の発掘調査　世知原町教委　財団法人古代学協会

表 3　長崎県本土部の遺構から出土した鉄製品一覧　文献

1 長崎県教委編2017『竹松遺跡』都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財調査 長崎県教育委員会
2 長崎県教委編2018『竹松遺跡Ⅲ』九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財調査 長崎県教育委員会
3 長崎県教委編2018『竹松遺跡Ⅳ』中巻 九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財調査 長崎県教育委員会
4 東彼杵町教委編1990『白井川遺跡』彼杵中央地区圃場整備事業にかかる調査 東彼杵町文化財調査報告書 第4集
5 長崎県教委編2012『中ノ瀬遺跡』一般国道497号伊万里松浦道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 長崎県教育委員会
6 大村市教委編1987『富の原』大村市文化財調査報告書　第12集　大村市教育委員会
7 長崎県教委編1985『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書　第73集　長崎県教育委員会
8 長崎県教委編1985『今福遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書　第77集　長崎県教育委員会
9 長崎県教委編1986『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書　第84集　長崎県教育委員会
10 大村市教委編2003『黒丸遺跡ほか発掘調査概報』Vol.3 大村市文化財調査報告書　第25集　大村市教育委員会
11 国見町教委編2005『十園遺跡Ⅱ』　国見町文化財調査報告書（概報）　第5集　国見町教育委員会
12 諫早市教委編1983『林ノ遺跡』諫早市文化財調査報告書第4集　諫早市教育委員会
13 南島原市教委編2006『権現脇遺跡』南島原市教育委員会
14 諫早市教委編2007『諫早市文化財調査年報Ⅰ』諫早市文化財調査報告書　第20集
15 田平町教委編2003『里田原遺跡』国営再編整備事業にかかる第37,40,41,44,46次発掘調査の報告　田平町教育委員会
16 田平町教委編1982『中野ノ辻遺跡・里田原遺跡』田平町文化財調査報告　第1集
17 高来町教委編1993『中江遺跡・上田原遺跡』高来町文化財調査報告書　第1集
18 長崎県教委編2006『門前遺跡』一般国道497号佐々佐世保道路建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ長崎県教育委員会
19 長崎県教委編2008『門前遺跡Ⅱ』一般国道497号佐々佐世保道路建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ長崎県教育委員会
20 長崎県教委編2020『竹松遺跡Ⅴ』九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ長崎県教育委員会
21 長崎県教委編2019『川端遺跡Ⅱ』都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ長崎県教育委員会
22 佐世保市文化科学館編1976『松ヶ崎古墳緊急発掘調査報告書』佐世保市文化科学館文化財調査報告 第4集 佐世保市教育委員会

表 4　長崎県本土部の遺構から出土した鉄製武器一覧（古墳時代前期から中期）文献

1 佐世保文化科学館編1976『松ケ崎古墳緊急調査報告』佐世保文化科学館文化財報告Ⅳ
2 佐世保市教委編2019『鬼塚古墳』佐世保市文化財調査報告書第17集　佐世保市教育委員会
3 大村市教委編1988『小佐古遺跡』大村市文化財調査報告書 第13集　大村市教育委員会
4 小田富士雄1970「黄金山古墳調査報告」『九州考古学』39,40号　九州考古学会
5 諫早市教委編1978『小野古墳』諫早市文化財調査報告書 第2集 諫早市教育委員
6 外海町教委編1985『宮田古墳群』外海町文化財発掘調査報告書 第2集　外海町教育委員会
7 東彼杵町教委編1994『ひさご塚古墳（Ⅱ）』東彼杵町文化財調査報告書第6集　東彼杵町教育委員会
8 有明町教委編2001『一野遺跡Ⅱ』有明町文化財調査報告書　第14集　有明町教育委員会

表 5 長崎県本土部の横穴式石室一覧　文献

1　松浦市教委編1988『小島古墳群』松浦市文化財調査報告書第4集
2　諫早市オームページ
3　長崎県教委編1980「鬼の穴古墳」『長崎県文化財調査集報Ⅲ』長崎県教委
4　長崎県教委編1989「野田古墳」『九州横断道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告6』長崎県文化財調査報告第93集　長崎県教育委員会
5　時津町教委　編1991『前島古墳群』時津町文化財調査報告書第1集　時津町教育委員会
6　諫早市教委編2008『丸尾古墳』諫早市文化財調査報告第22集　諫早市教委
7　小長井町教委編1998『長戸鬼塚古墳』小長井町文化財調査報告書第1集　小長井町教委
8　樋口隆康・釣田正哉1951「平戸の先史文化」『平戸学術調査報告』京都大学平戸学術調査団
9　平戸市史編さん委員会編1995『平戸市史』平戸市
10　平戸市史編さん委員会編1995『平戸市史』平戸市
12　桜井清彦1968『長崎県愛野町一本松古墳調査略報』早稲田大学文学部史学科資料室
13　長崎県教委編1978「柿ノ本古墳」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第35集　長崎県教委
14　国見町教委編1959『高下古墳調査報告』
15　吾妻町教委編1978『杉山古墳調査報告書』吾妻町の文化財3　吾妻町教育委員会
16　長崎県教委編1997『原始古代の長崎県』資料編Ⅱ　長崎県教育委員会
17　大村市教委編1993『玖島崎古墳群』大村市文化財調査報告 第17集 大村市教育委員会
18　長崎県教育委員会編 1980 『長崎県埋蔵文化財調査集報3』長崎県文化財調査報告書 第50集
19　雲仙市教育委員会編 2006 『雲仙市文化財調査報告書（概報）1：龍王遺跡(倉地川古墳)』雲仙市教育委員会
20　竹中哲朗2014「高来地域」『長崎県本土地域における古墳の様相』平成26年度　長崎県考古学会秋期大会資料 長崎県考古学会